



中西 準子

なかにし・じゅんこ  
工学博士。横浜国立大学名誉  
教授。環境リスク評価。文  
化功労者。75歳。

4月13日、熊本県での鳥インフル  
エンザ発生のニュースを聞き、これ  
こそこのコラムの題材にすべきだ  
と思った。県の素早い対応に加えて自  
衛隊の応援もあり、数日で関係農場  
の鶏の殺処分を含む全防衛措置が完  
了し、今月8日には蒲島郁夫知事が  
新たな感染がなかったとして終息を  
宣言した。過去の経験が生かされて  
迅速に到着した成功例と言える。

今回の原因と特定されているウイ  
ルスは今年1月、韓国で広がって  
いた高病原性鳥インフルエンザH5N  
8亜種との相関性が高いとのこと

で、発生源はわからないが、野鳥が  
運んできたのではないかと推測され  
ている。

これらのウイルスは人には感染し  
ないと考えられているが、濃厚汚染  
の場合には感染も否定できないし、  
また、いつ人インフルエンザに変異  
するか予想がつかないなどの危惧が  
言われている。ただここで、高病原  
性というのは、トリに対する毒性で  
あって人間に対するものではないこ  
とに注意を要する。

（こ）半世紀くらい、生物や人間が  
傷つく大きな事件はほとんど人為的

な化学物質が原因だった。しかし、  
今、生き物もたらす害毒の事件が  
増えている。それには、人工化学物  
質に対するのは異なる対応が必要  
である。ことに、その感染に野生生  
物が関与している場合には、問題が  
複雑になる。

牛や豚の病気である口蹄疫は、人  
への感染の問題はないと考えていい  
底的な口蹄疫対策が繰り広げられて  
いたのに遭遇し、ここまでやるのか  
と驚き、この問題の重要性を知らさ  
れた。米国に口蹄疫が入ってきた時  
の対策についても議論されていたの  
だが、意外なことにその内容の核心  
は伏せられているとのことだった。

そのプランでは大量発生を防ぐため  
に感染、非感染の区別なく絶滅危惧  
種も含めてその区域の動物を全て  
殺戮すること、また大規模な焼却や  
埋設によって起きる空気や水の汚染  
も認めるなど、一時的ではあるが廃  
棄物規制など環境基準の停止も含ま  
れていたからで、政府内の環境保護  
部局が神経を尖らせていた。

わが国での鳥インフルエンザの場  
合には、野生動物との関係もそれほ  
ど強くないので、米国の口蹄疫の  
場合ほど深刻ではないが、それでも  
注意すべきことが多々ある。まず、  
もしかして関係していないかもしれ  
ない渡り鳥を駆除してしまう恐れ、  
それとともに全く関係ない希少種を  
殺傷してしまう恐れがある。また逆  
に、野生動物保護の法律が足かせと  
なって、十分な防疫対策をとること

## 野生生物と闘い、共存する

世界一の富豪とも言われるビル・  
ゲイツ氏が個人のブログ（gate  
s notes、4月25日）で「世界  
で最も人を殺す動物」という記事を  
書いている。そこには、1年間に人  
間を何人死に追いやるかのリストと  
いう表に刺激的な図がある。危険な  
のはサメでもないし、オオカミでも  
ない。一番は蚊であり、年間72万5  
千人を殺している。もっと危険な  
のは植物だという書き込みもある。

野生の生物もたらす害毒と闘い  
つつ、やはり共存するための新しい  
規範を作る時代にきていることを痛  
感する。